

日本語学級の実践

授業に参加できる日本語の習得を目指して

大泉町立南中学校

大泉町の実情

- ▶ 製造業の盛んな大泉町では日系人の就労を認めた平成2年の制度改正を機に、工場の労働者としての日系人らの受け入れが急拡大。
- ▶ 平成元年12月に623人だった在留外国人数は右肩上がりに推移し、令和6年4月末時点で53カ国8452人が住む。大泉町の総人口の4万1491人の約2割に当たる。

大泉町の取り組み

平成2年：学校に日本語指導助手を配置し、日本語学級を開設。

平成3年：役場に通訳を配置。

平成7年：国際交流課（現多文化協働課）を新設し、医療機関に多言語の問診票を配布してきた。

大泉町の願い

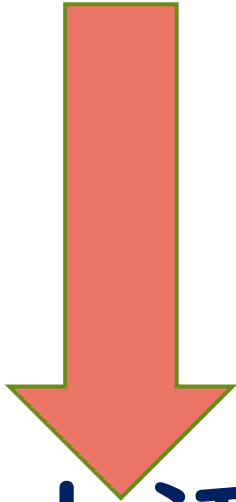
日本語を理解し、生活に不自由しないですら就労できる大人になつて欲しい。

外国人を受け入れてからの状況

日系人を含む外国人の滞日の増加とその外国人の子供が増加したため、大泉町の学校は、日本語教育をどうにかしなくてはならないという課題に直面した。

日本語学級はなぜ必要？

公立学校に入学



日本語が分からない

(一日教室にいることが厳しい)

日本語を母語としない子供たち
の教育が必要

新たに生じた課題

日常生活では流暢に日本語を
操っている子どもたちも、 いっ
たん、学校の授業に参加すると
その授業内容が理解できないこ
とが多いことが分かってきた。

学習に参加するための力

- ▶ 単に日常的な会話の力だけでなく、



学習に参加するための力



- ▶ 「違いを見つける力」 「関連付けて見る力」などの「**学ぶ力**」

これらの力の育成が大きな課題になってきた。

南中学校の実情

外国籍生徒の急激な増加

平成30年度	29 / 329人	(8.8%)
令和 6年度	55 / 303人	(18.0%)

専任で担当する教員が短いスパンで代わる・教員の経験者の不在

→ 系統的な学習ができず、場当たりの学習

→ 生徒も日本語を学べる充実感がない

日本語学級の活性化・内容の充実が急務

どのように活性化させるか？

- 人材の確保
- ・ 国語の教員の補強
(教科の教員の理解と協力)
- ・ 日本語学級経験者の配置
- ・ ボランティアの確保

●学校全体の取り組みと協力があった

時間割・授業の引き継ぎ表の作成

R6年度 日本語学級 時間割 (後期)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
	野田・海原	牛田	牛田	野田・笠原	笠原
1 校 時	2-1 (1) 社 2-3 (2) 3-1 (1) 3-3 (1) 理	1-2 (2)		1-2 (1) 理 2-1 (3) 3-2 (1)	道 徳
2 校 時	笠原	海原・野田	伊藤	伊藤	伊藤
	1-2 (2)	1-2 (1) 理 1-3 (1) 2-2 (2) 3-3 (1)	2-1 (1) 理 1-2 (2) 2-3 (2)	1-3 (1) 2-3 (2)	1-2 (2)
3 校 時	牛田	伊藤	伊藤・笠原	山下	野田・山下
	3-3 (1) 社 3-3 (6組)	2-1 (3)	2-1 (3) 3-3 (1) 社	2-1 (1) 理 3-1 (1)	1-2 社 (1) 2-1 (3)
4 校 時	山下	笠原	野田	野田・笠原	伊藤
	2-1 (1) 理 2-2 (2) 3-2 (1)	3-1 (1) 3-3 (1) 理	1-2 (1) 社 3-3 (1) 理	1-2 (1) 社 2-2 (2) 3-3 (1) 社	1-3 (1)
5 校 時		牛田	山下	山下	笠原
	学補 学校全体で曜日校 時指定された場合	2-1 (1) 社 3-2 (1) 3-3 (1) 社	2-1 (1) 社 2-2 (2)	3-3 (1)	2-1 (1) 理 1-2 (1) 社
6 校 時	笠原	伊藤	牛田	笠原	山下
	学活	2-2 (2) 3-3 (1) 社	1-2 (1) 理 1-3 (1)	ヨナミネ (6組)	3-3 (1)

6月3日(月)	6月4日(火)	6月5日(水)	6月6日(木)	6月7日(金)
	② 兼小2 読7~10 DLA 聴く工場見学 ちびむす あいさつ	④ 漢小2 11.12 総合 すたぱん小1 説明 2-① (コニシ) 作文用紙 記入	⑤ 漢テ→すたぱん →漢字カード	② かんし 14 13.15 すたぱん あいさつ
		② 漢音・項7. カード		
		③ 漢・読 9年1.2.3.4 カード		

授業引き継ぎファイル

Ⅰ 単位授業（50分間）のデザイン

全員：漢字

個別：語彙・文法・会話

10～15分

漢字検定

30～45分

語彙 会話

文法・教科補充

5分

確認・片付け

黒板の活用

今年度の日本語担当者による確認

1：部屋の引っ越し

- ・具体的な構想を提示

2：教材の分別

- ・古い教材の処分
- ・必要な教材を分別
(国語科教員を中心として)

3. D L A の検査の仕方を日本語学級担当者
で言語技能の検査方法を読み合わせ
4. 新しい教材の収集
5. 日本語担当の先生方の連携
6. ポケトーク・タブレットの活用
7. G o o g l e 翻訳の活用
8. 学校のホームページ：漢字の書き順
9. 日本語指導助手の支援（町から）

▶ 南中の課題を踏まえたうえで

各教科の授業に日本語で参加できる力を育成すること
(JSL) が重要となっていることを認識した。

J S L とは

Japanese as a Second Language

第二言語としての日本語を略したもの

母語が日本語ではない生徒が
「日本語で学ぶ力」を身につけさせることを目指す

J S Lカリキュラム

トピック型 J S Lカリキュラム

教科指向型 J S Lカリキュラム

二つのカリキュラムがある。

トピック型JSLカリキュラム

具体物や直接体験という活動を通して、しかも他の子どもとの関わりを通してながら日本語を学ぶ力を育成することが主目的

J S L トピック型

国語の教科書「たんぽぽのちえ」を読んで、実際のタンポポを見る。

国語の教科書「はなのみち」を読んで、実際に紙袋に種が入っているように見せる。

色を覚えるために、カラーボールを選ぶ動作を入れて確認をする。



教科指向型 J S L カリキュラム

各教科固有の**学ぶ力**の育成を目指すもの。
言葉や記号を通して抽象的な概念を理解
することが目標になる。

【活動例】

- 漢字の基礎的構成（部首、音訓、筆順、送り仮名）
の理解
- 「何」という漢字から「いつ、いくつ、いくら、どれ」などの設問文を読み解く練習

J S L を実践するために

① 外国人児童生徒受け入れの手引き

→ 日本語学級担当教師の役割の章を担当者全員に抜粋配布

② D L A (J S L 対話型アセスメント)

Dialogic Language Assessment

→ 日本語学級担当者全員に抜粋配布

を元に共通認識・実践していく。

DLA

日本語能力の測定方法として全国に汎用的なものとして開発された。

「DLA 〈はじめの一步〉」

「DLA 〈話す〉」 「DLA 〈読む〉」

「DLA 〈書く〉」 「DLA 〈聞く〉」

それぞれの検査で日本語の能力と言語技能を測定し、個別の授業を考えていく。

DLAの検査で分かることと課題

個により **4つの能力**のそれぞれのレベルが分かる。

個別のカリキュラムが必要になる。

→ 個別に対応できるのか？

→ **J S L** 対応ができるのか？

3. D L A の検査の仕方を日本語学級担当者 で言語技能の検査方法を読み合わせ

D L A 検査を全員が実践できるようにしてい
くことを確認

→ D L A 各分野の教材

検査用プリントファイル準備



D L Aの結果等を載せた個人の指導計画を作成し、今後の指導方針を決める。

→転出する場合は個別の指導計画は要録の写し等とともに転出書類となる。

様式
—

(大泉町立 南小 学校)

様式 2

スティーブ・ム	原研博雄中心	エナー・ジ・ム	中島信雄・鶴賀	スティーブ・ム	郷内野・田中幸雄・中島
---------	--------	---------	---------	---------	-------------

4. 新しい教材の収集

○漢字：大泉 2024

○フリー素材

文法
単語 (語彙)
会話

すたぺンドリル・ちびむすドリル
JYL (子どもの日本語ライブリ)
アギラ・コンドル・コンコ・
トゥカーノ (東京外大教材)

漢字プリント 置き場所

授業前に生徒は自分が
受けるテストを引き出
しから出す。



個別のファイルを作成。



教材の収集・整理



5. 日本語担当の先生方の連携

○タブレット（Chromebook）の活用

- ・ Google Classroom（先生用）の作成

6. ポケトーク・タブレットの活用

7. Google翻訳の活用

8. 学校のホームページ：漢字の書き順

9. 日本語指導助手の支援（町から）

2人の教員と日本語指導助手の3名で6名の生徒を担当している授業もある。

成果と課題

成果

- ・ 教室が広くなったことで、落ち着いて授業に取り組めるようになった。
- ・ 教師の学習会を開くことで、共通認識のもと、DLAの検査に取り組み、評価ができた。
- ・ 授業デザインを考えることで、漢字に偏らずに語彙や文法など幅広い授業につなげることができた。
- ・ Google Classroom（教員）や授業記録簿での確認、黒板に連絡事項を書くなどで横のつながりをとるようにした。
→個別対応での授業の流れがある程度つくれた。
- ・ 教材の印刷や新しい教材を協力して準備活用できた。

生徒の変容

- ・ 漢字が丁寧に書けるようになってきた。
- ・ 語彙や文法等の学習が増えたことで、しっかりした文章が書けるようになってきた。
→連絡帳を書くようになってきた。
- ・ 生活に落ち着きが出てきた。

今後の課題

- ▶ 始まったばかりで、試行錯誤を重ねている段階。
- ▶ 個の能力に応じたカリキュラムの作成と実施。
- ▶ JSLカリキュラムを実践することで、授業への参加が早くできるような支援をしていく。
- ▶ 授業変更などの連絡がうまく連携できないことがある。
- ▶ 担当教諭が不在のときの補充。
- ▶ さらなる教材の開拓。

参考文献

文部科学省

外国人児童生徒受け入れの手引

DLA

かすたねっと

東京外国語大学

DLA

外国につながる子どもたちのための教材

- ・アギラ（在日ヒロピン人児童のための教材）
- ・コンドル（欧米スペイン語圏出身児童向け教材）
- ・トゥカーノ（在日ブラジル人児童のための教材）
- ・コンコ（ベトナム出身児童のための教材）

愛知教育大学

日本語教育支援センター

JYL（こどもの日本語ライブラリー）

ちびむすドリル

すたぺんドリル